

平成 28 年 11 月 10 日

# 南の風 206

南部ミニバスケットボール連盟  
会 長 藤原 敬一

アカツキファイブの速攻、運びについてです。

読者の皆さんは、『速攻』というタクティクスを指導する時に、どういう順序で指導されるでしょうか。

通常の（ミニバス、中学、高校）基本速攻は、タッチダウンパス狙いが第1、次にコフィンコーナー付近へつなぎパスが第2、そして出ない場合に45° へのアウトレットパスから縦へのつなぎ、あるいは、ドリブルカのあるガードにパスして展開を託す、という具合になると思います。

さて、今回のアカツキファイブには、**絶対的なガード『吉田亜沙美』選手**がいました。全試合でと言っても過言ではない位、**誰がリバウンドを取っても迷わず吉田選手にボールをパスして、ボールを前に展開していました。**皆さんご承知のように、吉田選手は2年連続でアジアNO1のガードの称号を与えられた選手です。ビジョン、パスカ、空間認知力、読み予測能力、ドリブルカのどれをとってもアジアでは、右に出るものはいません。吉田選手に任せるのは当然です。リオ五輪でも世界の強豪を相手に、何回も速攻を成功させました。特にホットラインと呼ばれた、吉田&渡嘉敷の速攻の合わせは世界でも十分通用していました。吉田選手のリザーブの町田瑠唯選手も、速攻の時に必ずパスを受けていました。町田選手のパスカ、空間認知力、ドリブルカにも素晴らしいものがあります。この2人の能力が今回のアカツキファイブの『核』でした。そしてこの2人の速攻ゲームメイクが、本川選手、栗原選手の走り、渡嘉敷選手や間宮選手（リバウンドを取った選手）のトレイルプレイへとつながったのです。また、誰にどのようにフィニッシュさせるかが、常に吉田選手の頭にはあったと思います。

私の考えです。このように世界に通じた日本の速攻なのですが、よく観察すると吉田選手がドリブルでエントリーすることが多かったです。その分ディフェンスに帰陣され、ディフェンスを整えられた場面もありました。リバウンダーが吉田選手にボールを渡す『**僅かな遅れ**』を生じさせないためには、やはり第1パスは、必ず吉田選手に出すと決めてしまうのではなく、状況によって前につなげる展開があってもいいと思いました。その方がアウトナンバーになる確率が増える気がします。ドリブルはどんなに速くてもパスには及びません。（吉田選手のドリブルカにケチをつけるつもりは毛頭ありませんが）

アカツキファイブの速攻について書きました。ミニバスでも中学校でも、速攻の指導は必須です。チームにボール運びを任せられる、ずば抜けた選手がいればいいのですが、いない場合は上記のようにタッチダウンパス、縦へのパス、アウトレットパス、ドリブルアウトレットを選択することになります。リバウンドからランナーへの合わせや、ボールつなぎを繰り返して練習することが必要です。その時に留意することは、ミドルゾーン（コート真ん中のエリア）の使い方です。例えば、速攻のミスで多いのがミドルゾーンでのパスをディフェンスにカットされることです。ミドルゾーンは敵味方の選手の往来が激しいエリアです。リバウンドを取った時、味方しかルックしないでパスをし、インターセプトされるケースがあります。ボールつなぎのポイントとして、ミドルゾーンでパスを受ける時は、ボールサイドカットからのミートが欠かせません。またサイドラインの走りから、ストップしてアングルカットで合わせることも有効です。ミドルゾーンを走る、ボールミートしない味方へのパスは極めて危険です。